「地球にやさしい」モノづくり

「脳科学」で最適環境探る

エネルギー資源の枯渇や地球環境問題への関心が高まる中、モノづくりのあり方が問われている。従来のままでは地球環境への負荷が大きく、持続可能な発展が望めない。国際科学振興財団の大橋力理事主席研究員は脳の働きを踏まえたモノづくりにアプローチする。科学や技術ありきではなく、生物としての人間に適した環境づくりに役立つモノづくりを提唱する。

国際科学振興財団
理事主席研究員
大橋 力氏

おおはし・つとむ
56年（昭31）東北大農卒。農学博士。文部省放送教育開発センター教授、ＡＴＲ感性脳機能特別研究室長、千葉工業大学教授などを経て国際科学振興財団理事主席研究員兼文明科学研究所所長。栃木県出身、74歳。

―現代が物質文明の中で行き詰まりつつあります。

「現在のモノづくりの先輩は西洋文明だ。工業社会になってから、その時の科学と技術の進歩に寄り添う形でモノづくりを行ってきた。その流れで工業技術を突き詰めた結果、高性能なモノが目的なく開発されている。本当に必要としているものがどれだけあるだろうか」

「一方でニーズを探りながら言語化し、誰でも分かるようにして需要を喚起している。つまり、技術的な方向と、明示的な需要の方向の交差点に今のモノづくりがある。もし、それがうまくいっていれば人間は誰でも幸せになっているはず。でも、そうではない」

―モノづくりと人間の幸せがどう関係してくるのですか。

「モノづくりの視点で抜け落ちているのは人間に最もよい生存状態は何かということだ。モノに比べて人間や心の働きは解明されていない。感性脳機能を発展させる脳の仕組みを研究し、心の状態が相当分かるようになってきた。そこを解明すれば、人間の遺伝子と脳が決定している最適な生き方のモデルが考えられる。有限な地球生態系や資源を前提に最適な状態を発見できる。そこに新しいモノづくりがある」

―脳の機能からみると物事の考え方が変わります。

「ワーカホリックほど幸せなものはない。ウサギ小屋に住み働き中毒という生き方こそ実は脳の仕組みからすると合理的だ。まさに中小企業こそ活路がある。なぜかと言えば事業の入り口から出口まで自分の感覚領域にあるから。自分、父親、弟子などが力を合わせて一喜一憂する。そこにドラマがある。それが脳科学で正しいと言っていく」

記者の目

変化の可能性

これまでモノづくりは科学と技術の進歩の延長線上に行われてきた。しかし、人間という生物にとって最適な生存環境をつくりだしているか、という問いにこたえられるだろうか。大橋氏は脳科学から人間にとって最適な状態を導き出せるという。その時モノづくりは大きく変わる可能性がある。人間自身をもっと知る努力が必要かもしれない。

（村山茂樹）